

講演「現代日本の開化」における「内発的」、「外発的」について：ウィリアム・ジェイムズとの関わり

藤本，晃嗣
米子工業高等専門学校：講師

<https://doi.org/10.15017/4103503>

出版情報：九大日文. 34, pp.2-16, 2019-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

講演「現代日本の開化」における「内発的」、「外発的」について

——ウイリアム・ジエイムズとの関わり——

F. H. HORTON
W. J. H. HORTON
藤本 晃嗣

一、はじめに

よく知られるように、夏目漱石は明治四十四年に行われた講演「現代日本の開化」⁽¹⁾において、日本の近代化を「内発的」、「外発的」という言葉を用いて論じている。この講演は古くから取り上げられてきたが、例えば中村光夫氏の次の見解にも見られるように、その多くはこのような捉え方に着目したものであった。

かうした「開化」はたとへ「日本が日本として存在する」必要上止むを得ぬものにして、その根本において、外界からの「圧迫にあつて不自然な発展を余儀なくされた」文化であると断じ、更に進んで「さう云ふ外発的な開化が心理

的にどんな影響を吾人に与へるか」といふ問ひを発してゐる。そしてこの問ひに対する答へが彼の講演の眼目をなしてゐるのであるが、それについてまづ注意しなければならぬのは、この問ひ自体の獨創性である。すなはちここで彼は所謂文明開化の風潮のもたらす最も重大な問題を結局、そのなかに生きる国民の心理の歪みとしてはつきり捕へてゐる。

(「文明開化の性格」⁽²⁾)

ここで中村氏は、その問題設定のあり方、つまり日本の開化を「外発的」と捉え、それによる「歪み」を指摘するまなざしに漱石の「獨創性」を見ている。「現代日本の開化」は、このように日本の開化を「内発的」なものを欠いた「外発的」なものと論じ、それゆえに「斯う云ふ開化の影響を受ける国民はどこかに空虚の感がなければなりません、又どこかに不満と不安の念を懐かなければなりません」、「神経衰弱に罹る方が当り前の様に思はれます」と批判した点に漱石の獨自性を見ることで注目されてきたと言える。この点を講演の主眼とするのは、近年発行された『漱石辞典』の「現代日本の開化」の項にも次のようにある通り、現在でも基本的には同じである。

すなわち西洋への追従を専らとして性急に進んでいった維新以降の物質的な近代化が、それまでの日本人の生活様式に十分内在化されないままに進められていった点で「外発

的」であり、その「内発的」な自然さを欠いた物質的な近代化のなかで日本人が疲弊していつているとされる。

〔現代日本の開化〕⁽³⁾

問題としたのは、中村氏が「獨創性」として評価する漱石の見方の基盤となる「内発的」、「外発的」という捉え方について、それは同時代の思想と無関係なものであるのかということである⁽⁴⁾。本稿では、「外発的」な変化を批判する認識について漱石の他の評論などと共有される問題意識から考察し、漱石の文学観と根を同じくするものであることを示す。そして、「内発的」、「外発的」という捉え方がアメリカの心理学者であり哲学者でもあるウイリアム・ジェイムズ (William James) の主知主義批判とつながるものであることを明らかにする。

二、「現代日本の開化」と「中味と形式」、「イズムの功過」

「現代日本の開化」の「内発的」と「外発的」という言葉は次のように説明される。

こゝに内発的と云ふのは内から自然に出て発展すると云ふ意味で丁度花が開くやうにおのづから蕾が破れて花瓣が外に向ふのを云ひ、又外発的とは外からおつかぶさつた他の力で已を得ず一種の形式を取るのを指した積なのです、

(「現代日本の開化」、傍線藤本 以下同じ)

ここでは「内発的」という言葉は「内から自然に出て発展する」として「自然」という言葉と関連付けて説明され、一方「外発的」であるということが、「一種の形式を取る」ものと言い換えられている。「現代日本の開化」は明治四十四年に関西で行われた四つの講演の内の一つであったが、この「形式」という言葉はその中の一つである講演「中味と形式」⁽⁵⁾とのつながりを思わせる。「中味と形式」においては、まず前半部分で学者のような「観察者」が作り出す「統一」は、「形式丈の統一で中味の統一にも何にもならない纏め方」になっており、「一種の形式を事実より前に備へて置いて、其形式から我々の生活を割出さうとするならば、ある場合には其処に大変な無理が出来なければならぬ」として、「形式」によつてものごとを捉え、また処理する姿勢が批判される。そしてそのような「形式」に対する否定をもとに、後半部分において、日本社会の推移に關して次のような見解を述べる。

そこで現今日本の社会状態と云ふものは何うかと考へて見ると目下非常な勢ひで変化しつゝある、それに伴れて我々の内面生活と云ふものも亦、刻々と非常な勢ひで変りつゝある、瞬時の休息なく運動しつゝ進んで居る、だから今日の社会状態と、二十年前、三十年前の社会状態とは、大変趣きが違つて居る、違つて居るからして、我々の内面生活も違つてゐる、既に内面生活が違つてゐるとすれば、それ

を統一する形式と云ふものも、自然ヅレて来なければならぬ、若し其形式をツラさないで、元の儘に据ゑて置いて、さうして何処までも其中に我々の此変化しつゝある生活の内容を押し込めやうとするならば失敗するのは眼に見えてゐる、(中略) 内容の変化に注意もなく頓着もなく、一定不變の型を立て、さうして其の型は唯だ在来あるからと云ふ意味で、又其型を自分が好いて居ると云ふだけで、さうして傍観者たる学者の様な態度を以て、相手の生活の内容に自分が触れることなしに推して行つたならば危ない。

(「中味と形式」)

当時の日本の社会状況の変化により、人々の内面が変化しているにもかかわらず、従前の人間関係のあり方を「型」として「唯だ在来ある」、「自分が好いて居る」という理由で押しつけることの危険性が述べられている。これは、「内容」、「中味」の変化を「型」や「形式」で押し込めようとすることを批判したものである。この点は、「現代日本の開化」で「急に自己本位の能力を失つて外から無理押しに押されて否応なしに其云ふ通りにしなければ立ち行かないといふ有様になつた」という、自然の変化を無視して西洋の文化を「形式」として受け入れなければならぬ状況への批判と、ベクトルの向きこそは逆であるが同型のものと言える。どちらも自然な発展、変化を「形式」や「型」といつたもので制御しようとすることを問題にしたものなのである。

また、「現代日本の開化」では、このような「型」や「形式」の批判と同様の観点から「定義」に対して批判を行っている。「現代日本の開化」では、後半部分で先のような日本の開化の批判が行われるが、前半部分において「開化」の説明がなされ、その前に「定義」することについて述べられる。ここで漱石は、「定義」の問題点として「生きたものをわざと四角四面の棺の中へ入れて特更に融通が利かない様にする」ことを述べるが、これは「中味と形式」の「一種の形式を事実より前に備へて置いて、其形式から我々の生活を割出さうとするならば、ある場合には其処に大變な無理が出来なければならぬ」とすることと同じ思考である。また、「現代日本の開化」において、「定義」を「變化するものを捉へて變化を許さぬかの如くピタリと定義を下す」と、變化を捉えられないものとして批判する。これは、「中味と形式」で「内容が変れば外形と云ふものは自然の勢ひで變つて来なければならぬといふ理屈」という言葉に見られるように「内容」の變化にあわせて「外形」が變化せねばならないという考えにつながるものである。

このように「現代日本の開化」における「内発的」という捉え方の根底には、「型」や「形式」などが變化と対立するものという考えがある。なお、「現代日本の開化」に「定義」すること、で「其便宜をも受ける事が出来る」とあり、また「中味と形式」に「学者のやる統一、概括と云ふものゝ御蔭で我々は日常どの位便宜を得てゐるか分かりません」とあり、「定義」することや「形式」で捉えることによつて「便宜」が得られる、つまり役

に立つと述べられているように、「定義」や「形式」自体が否定されているのではない。漱石が批判するのは、変化しているにも関わらず「形式」や「定義」を優先する思考方法であり、また変化を「形式」や「型」で抑え込もうとする考え方である⁽⁶⁾。

このような漱石の思考はこの時期の講演だけに見られるものではなく、いくつかの評論を貫く基本的な姿勢と言える。中でも「現代日本の開化」、「中味と形式」との関連で分かりやすい例として、明治四十三年発表の「イズムの功過」が挙げられる⁽⁷⁾。

同時に多くのイズムは、零碎の類例が、比較的緻密な頭脳に濾過されて凝結した時に取る一種の形である。形と云はんよりは寧ろ輪廓である。中味のないものである。中味を棄て、輪廓丈を畳込むのは、天保銭を脊負ふ代りに紙幣を懐にすると同じく小さな人間として軽便だからである。

(中略)

従つてイズムは既に経過せる事実を土台として成立するものである。過去を総束するものである。(中略) 科学者の研究が未来に反射するといふのはこの為である。然し人間精神上の生活に於て、吾人がもし一イズムに支配されんとするとき、吾人は直に与へられたる輪廓の為に生存するの苦痛を感ずる者である。単に与へられたる輪廓の方便として生存するのは、形骸の為に器械の用をなすと一般だからである。其時わが精神の発展が自個天然の法則に遵つて、自己に真実なる輪廓を、自らと自らに付与し得ざる屈辱を

憤る事さへある。

(「イズムの功過」)⁽⁸⁾

「自個天然の法則」が「型」や「与えられたる輪廓」によつて阻害され、それにより「苦痛を感ずる」という捉え方は、そのまま「現代日本の開化」における「内発的」な発展を阻害される「外発的」な開化を余儀なくされるがゆえに「神経衰弱に罹る」とする考えと同型のものである。また、「この型を以て未来に臨むのは、天の展開する未来の内容を、人の頭で拵えた器に盛終せようと、あらかじめ待ち設けると一般である」という点も、旧来の「型」を押し付けることを批判した「中味と形式」とやはり同型である。そしてこれらは、「イズム」を変化より優先するという意味で、「現代日本の開化」での「変化するものを捉へて変化を許さぬかの如くピタリと定義を下す」という「定義」に対する批判と同根のものと言える。

三、漱石とジェイムズ

先に「現代日本の開化」において「定義」が批判されている

のを見たが、そこでは具体的な例として次のことが挙げられている。

つまり変化をするものを捉へて変化を許さぬかの如くピタリと定義を下す、巡査と云ふものは白い服を着てサーベルを下げて居るものだ杯と天から極められた日には巡査も遣り切れないでせう、家へ帰つて浴衣も着換へる訳に行かなくなる、此の暑いのに剣ばかり下げて居なければ済まないのは可哀想だ、騎兵とは馬に乗るものである、是も御尤には違ないが、いくら騎兵たつて年が年中馬に乗りつゞけに乗つて居る訳にも行かないぢやありませんか、少しは下りたいでさあ、

(現代日本の開化)

ここでは、「巡査」と定義された人間が、仕事以外の家でくつろいでいるときなどの「巡査」以外のあり方を否定されるといふ例が、「生きたものをわざと四角四面の棺の中へ入れて特更に融通が利かない様にする」との説明のために述べられている。この「巡査」の例は別の講演である「教育と文芸」にも見るこゝとができる。

話は余談に入るが、独逸の哲学者が概念を作つて定義を作つたのであります。しかし巡査の概念として白い服を着てサーベルをさして居るときめると一面には巡査が和服で兵

児帯のこともあるから概念できめてしまふと窮屈になる、定義できめてしまつては世の中の事がわからなくなると仏国の学者はいうて居る。

(「教育と文芸」)⁹⁾

形は違うが、「定義」が変化を捉えられないという点を批判するという要点は同じである。この「仏国の学者」は『漱石全集』の注ではアンリ・ベルクソン (Henri Bergson) とされている¹⁰⁾。しかし、この講演が行われた明治四十四年六月十八日の時点ではまだ『時間と自由』(Time and free will) をはじめ、ベルクソンの著作を読んでいないものと推測される¹¹⁾。他の著作の可能性も排除できないが、これらは、すでに指摘もあるように¹²⁾、ジエームズ『多元的宇宙』(A pluralistic universe) を参照したものと考えるべきであろう¹³⁾。

and you will remember Sigwart's epigram that according to it a horseman can never in his life go on foot, or a photographer ever do anything but photograph.

(A pluralistic universe)¹⁴⁾

「そして諸君は、こういう考え方にしがえれば、騎手は一生自分の足では歩けないし、写真師は、写真をとる以外のことではできないことになる、というジークヴァルトの警句を思い出すであろう。」

ここに、「騎手は一生自分の足では歩けない」という例があるが、これは「現代日本の開化」の「いくら騎兵だつて年が年中馬に乗りつづけに乗つて居る訳にも行かない」という例と同じものである。ここから、この時期のジェイムズに対する関心の高さがうかがえる。先に見たように、「現代日本の開化」における「内発的」、「外発的」にはその根底に「定義」への批判があり、特にこの時期の漱石が、そのような問題に関わることを繰り返し言及していたことを思うと、「現代日本の開化」の「内発的」、「外発的」という捉え方がジェイムズの思想とつながるものであることが推測される。

夏目漱石の晩年における『多元的宇宙』とのかかわりは従来から注目されてきた。しばしば引用されるものであるが、明治四十三年から連載された「思い出す事など」で漱石は次のように述べる。

多元的宇宙は約半分程残つてゐたのを、三日許で面白く読了つた。ことに文学者たる自分の立場から見、教授が何事によらず具体的事実を土台として、類推で哲学の領分に切り込んで行く所を面白く読み了つた。余はあながちに弁証法を嫌ふものではない。又妄りに理知主義を厭ひもしない。たゞ自分の平生文学上に抱いてゐる意見と、教授の哲学に就いて主張する所の考とが、親しい気脈を通じて彼此相倚る様な心持がしたのである。ここに教授が仏蘭西の学者ベルグソンの説を紹介する辺り

を、坂に車を転がす様な勢で馳け抜けたのは、まだ血液の充分に運びもせぬ余の頭に取つて、どの位嬉しかつたか分らない。余が教授の文章にいたく推服したのは此時である。
(「思い出す事など」)⁵⁾

ここで漱石はジェイムズに対する共感を隠すことはない。従来においても、ここで漱石が語る自己の文学観とジェイムズ哲学の共振について様々に論じられてきた。ただ、例えば重松泰雄氏が「しかしそれだけでは、むしろ漱石の意味するところは明瞭ではない」と述べるように⁶⁾、ここでの漱石の共感ほどのような点によるものなのか、漱石自身が語つておらず必ずしも明確ではない⁷⁾。

そこで、ここでは先に見たような「定義」や「型」に対する批判と、ジェイムズの「理知主義」(主知主義)批判とのつながりから、漱石が述べる「自分の平生文学上に抱いてゐる意見」と「教授の哲学に就いて主張する所の考」という点の結びつきを考察していく。

『多元的宇宙』において、先の「騎手」などの例が挙げられるのは、次のことを説明するためである。

The misuse of concepts being with the habit of employing them privately as well as positively, using them not merely to assign properties to things, but to deny the very properties with which the things sensibly present themselves. Logic can

extract all its possible consequences from any definition, and the logician who is *unerbittlich consequent* is often tempted, when he cannot extract a certain property from a definition, to deny that the concrete object to which the definition applies can possibly possess that property. The definition that fails to yield it must exclude or negate it. This is Hegel's regular method of establishing his system(...)

and you will remember Sigwart's epigram that according to it a horseman can never in his life go on foot, or a photographer ever do anything but photograph.

(A pluralistic universe⁸⁾ イタリック体原文、以下同じ)

「概念の乱用がはじまるのは、概念を私的のみならず積極的にも用い、単に事物に性質を帰するのみならず、事物が感覚的に示している性質を否定すること」にまで、用いるという習慣とともにはじまるのである。論理は、どんな定義からもそのあらゆる帰結を引きだすことができる。そうして徹底的に整合的な理論家は、ある定義から一つの性質を引きだすことができない時、この定義が適用される具体的な対象はこの性質をもっているかもしれない、ということまで否定したい誘惑にかられることが多い。ある性質を生みださない定義は、この性質を排除するか否定するかしなくてはならない。これが、ヘーゲルがその体系をうちたてるのに採用した一般的なやり方である。(中略)

そうして諸君は、こういう考え方にすれば、騎手は一

生自分の足では歩けないし、写真師は、写真をとる以外のことはできないことになる、というジークヴァルトの警句を思い出すであろう。」

「概念」や「定義」の問題点として、その「定義」に入らないものの存在を否定するという点を指摘している。『多元的宇宙』の中心テーマは、「実在を概念的にのみ理解しようとする悪しき知性主義」を批判し、「これに代わるものとして、実在を経験されるがままに理解」するというあり方を提示することにあつた。⁹⁾ ジェイムズの主知主義批判は、先の例を使うなら、ある人物を「騎手」という「概念」で捉えたら、その人は自分の足で歩くことはできないと考えるような、物事を「概念」をもとに理解する姿勢を批判するものである。このような思考は、『多元的宇宙』を読む前に書かれたと考えられる「イズムの功過」と同じものと言える。

此型を以て未来に臨むのは、天の展開する未来の内容を、人の頭で拵へた器に盛終せやうと、あらかじめ待ち設けると一般である。器械的な自然界の現象のうち、尤も単調な重複を厭はざるものには、すぐ此型を応用して実生活の便宜を計る事が出来るかも知れない。科学者の研究が未来に反射するといふのはこの為である。然し人間精神上の生活に於て、吾人がもしイイズムに支配されんとするとき、吾人は直に与へられたる輪廓の為に生存するの苦痛を感じる

ものである。(中略)

一般の世間は自然主義を嫌つてゐる。自然主義者は之を永久の真理の如くに云ひなして吾人生活の全面に涉つて強ひんとしつゝある。

(「イズムの功過」)

「イズム」で物事を捉えるというのは、まだわからない先の内容を、「人の頭で拵へた器に盛終せやう」とすること、つまりある「イズム」の範囲内で捉え、それ以外のものを考慮しないという姿勢のことである。ここでは具体的に、当時の自然主義の文学者や評論家達が自然主義を「永久の真理」とする主張、つまり自然主義という一つの「イズム」、一つの「型」でもつて文学を定義し、それ以外のものは文学ではないとして切り捨てる姿勢を批判している。同様の見解は、少し前に書かれた「文芸とヒロイック」⁽²⁰⁾にも見ることが出来る。イギリスの艦船が沈没した際に艇員が争つて助かるうとしたため窓の下に折り重なつて死んでいた事例をあげ、「本能の権威のみを説かんとする自然派の小説家はこゝに好個の材料を見出すであらう」と述べ、その自然主義の作家達が、「けれども現実はいずれも現実はこれ丈である。其他は嘘であると主張する」ことに対して、沈没する船の中で冷静な状況報告と率直な自己表白を書いた「佐久間艇長の遺書」をもとに、「自然派の作家は、一方に於て佐久間艇長と其部下の死と、艇長の遺書を見る必要がある」と主張する。つまり、当時の自然主義が「現実暴露の悲哀を感じる」ような自らの主

張に好むもののみを取り上げ、「佐久間艇長と其部下の死と、艇長の遺書」に見られるような「ヒロイック」な行為を排斥する姿勢を批判しているのである。これらは、『多元的宇宙』の「この定義が適用される具体的な対象はこの性質をもっているかもしれない、ということまで否定したい誘惑にかられること」、つまりある定義から外れるようなものはその存在を否定してしまふということと同じものである。漱石の文学とジェイムズの哲学の親和性はこの辺りに求めることができると思われ

る。
漱石は、このような「イズム」、「主義」で物事を捉えることに對する批判を繰り返していた。それがもつとも明確に表れるのが講演「創作家の態度」である。⁽²¹⁾

又一例を云ふと、こゝに一人の男がある。此人は学校へ出る。其時には教師の仲間へ入れて見なければなりません。筆を執る。其時には著作家の群に伍するものと認めるのが至当であります。家へ帰る。すると夫とも親ともして種類別をしなければならぬ。此人は一人であるけれども是程の種類へ編入される資格があるのであります。

(「創作家の態度」)⁽²²⁾

「教師」とされる人物であつても、その人間は著作を行い、親としても存在する。このように変化し続けるものを、一つの定義で固めるのではなく、様々な形で捉えるべきであることが是

程の種類へ編入される」という言葉で述べられている。そして、先の引用に続けて文学についても同様の発想で捉えることを主張する。

作物も其通りであります。之を分解し、之を綜合して、同一物のある部分を各適当な主義に編入するのが穩当であります。そんな錯雜した作物がないと云ふのは過去の歴史を眼中に置いた議論で是から先に作物の性質が、どの位に複雑な性質をかねてくるかを窮めない早計の議論かと思ひます。

(創作家の態度)

このように、文学作品についても一つの作品を様々な要素を照らし合わせながら考えていくべきであるということが述べられる。この考えは次のところにも見ることができよう。

もう一つ歴史的研究に就ての危険を一言簡単に述べて置きたいと思ひます。主義を本位にして動かすべからざるものと見ますと、前申した通り作家(即ち作物)を取り崩して掛からんと不都合が生ずる如く、作家(即ち作物)を本位として動かすべからざるものとすると、今度は主義の方にもつと融通をつけなければなりません。融通をつけるに云ふと、一つの作物のうちには同時に色々な主義を含んで居る場合が多い、少なくとも含んで居る場合があり得る

のですから、斯様な作物を批評したり分解したり説明したりする際には、一主義のもとに窮窟に律し去る習慣を改めて、歴史的には矛盾する如くに見做されて居る主義でも構はないから、之を併立せしめて、苟しくも其作物のある部分を説明するに足る以上は之を列挙して憚からん様にしなければ、矢張り前段同様の不都合に陥る訳であります。

(創作家の態度)

ここでの「主義を本位」にし、「一主義のもとに窮窟に律し去る」というのは、ある作品を例えば自然主義の作品として定義したならば、その作品の自然主義以外の要素が切り捨てられるという点で、ジェイムズの「概念の乱用」であり、「事物が感覺的に示している性質を否定することにまで、用いるという習慣」と言える。また、「歴史的には矛盾する如くに見做されて居る主義でも構はないから、之を併立せしめて」「列挙して憚からん様に」とするというのは、作品を感じるままに分析し、「事物が感覺的に示している性質」をもとに説明することを勧めるものと言えよう。

主知主義に対するジェイムズの批判は、このような「概念の乱用」、「概念」を優先して物事を捉える姿勢に向けられていた。そして漱石の文学についての意見、特に当時の自然主義の姿勢に対して主張するのは、作品を一つの「主義」で裁断することや文学を自然主義のみに限ってしまうことといった、「主義」をもとに文学を捉えることに對する批判であつた。こういった「概

念」や「主義」の扱い方への批判こそが、漱石の「自分の平生文学上に抱いてゐる意見」と『多元的宇宙』において「教授の哲学に就いて主張する所」に共通する点である。漱石が感じた「親しい気脈を通じて彼此相倚る様な心持がした」というのは、この共通性によるものと言える。

「現代日本の開化」における「外発的」な開化が「歪み」をもたらすという主張は、変化を「形式」や「型」で制御することへの批判を根底にしたものであり、それは「定義」や「主義」をもとに物事を見ると変化を捉えることができないという認識とつながるものである。さらにそれは、変化を否定するものとして「概念」を批判するジェイムズ哲学と親和性がある。漱石の日本の開化へのまなざしには、このようなジェイムズ的な問題意識が底流していると考えられる。

四、日本におけるジェイムズ、ベルクソン受容との関わり

このような問題意識は、「外発的」な開化と対照的に、「花が開くやうに」「自然に出て発展する」ものとして語られる「内発的」な開化という捉え方にも関わるものである。『多元的宇宙』では、先に見たような概念の批判は次のように展開されていく。

When we conceptualize, we cut out and fix, and exclude everything but what we have fixed. A concept means a *that-and-no-other*. Conceptually, time excludes space; motion

and rest exclude each other; (...) whereas in the real concrete sensible flux of life experiences penetrate each other so that it is not easy to know just what is excluded and what not.

(A pluralistic universe)⁽²³⁾

「我々は、概念をつかう時、きりだし、定着し、定着した以外のものは、すべて排除してしまう。一つ概念は、一つ、これであつてほかのものではないものを意味する。概念的には、時間は空間を排除し、運動と休止とはお互いに排除しあう。(中略)ところが、実際の具体的な、生の感覚的な流れにおいては、もろもろの経験は、お互いにひたしあつているので、何が排除されていて何が排除されていないのかを知ることがむずかしい。」

(訳文の傍点原文 以下同)

これは、「思い出す事など」で「坂に車を転がす様な勢で駆け抜けた」と漱石が語ったベルクソンの哲学を紹介した第六講からのものである。ここでは、これまで見たような概念の否定から「実際の具体的な、生の感覚的な流れ」の根源性が語られる。このことはさらに次のようにつなげられる。

What really exists is not things made but things in the making. Once made, they are dead, and an infinite number of alternative conceptual decompositions can be used in defining them. But put yourself in the making by a stroke of intuitive

sympathy with the thing and, the whole range of possible decompositions coming at once into your possession, you are no longer troubled with the question which of them is the more absolutely true. Reality falls in passing into conceptual analysis, it mounts in living its own undivided life — it buds and bourgeons, changes and creates. Once adopt the movement of this life in any given instance and you know what Bergson calls the *dévenir-réel* by which the thing evolves and grows.

(A pluralistic universe) ⁽³⁴⁾

「真に存在するものは、つくられた事物ではなく、つくられている事物である。いったんつくられてしまうとそれらは死んでいる。そうしてそれらを定義するには、無数の概念的な分解法のどれを使つてもよいのである。しかし、事物を一気に共感的に直感することにより生成の中に身をおいてみるならば、これらさまざまの可能な分解法的全範圍を手に入れることができ、どの分解法が、より絶対的に真なのか、などという間にはわずらわされないでもすむようになる。実在は、すぎゆきながら、概念的な分析の中におちこむ。それは生きながら、それ自身分割できない生ののぼっていく——それは芽をだし生長し、変化し創造する。この生の運動の実例をどれでもいいからとってみると、ベルグソンのいわゆる真の生成を知ることができる。この生成によって、事物は展開し生長するのである。」

「」では概念の批判をもとに、ベルグソンの「真の生成 (*dévenir-réel*)」について語られている。この言葉はベルグソン『創造的進化』(*L'Évolution créatrice*)の第四章に見られるものである。⁽³⁵⁾ ベルクソンは明治末から大正初期の日本で主要著書の翻訳やそれらを紹介、解説した本が多数出版されるなど流行したことが知られるが、その理由としてこのような概念を否定して「生成」を語る思想が注目されたことが考えられる。例えば日本でベルグソンを初めて本格的に紹介した哲学者西田幾多郎は、次のようにその哲学を解説している。

ベルグソンの思想に於て最も特色のあるもので、かねて氏の哲学の根底となつて居るものは純粹持続 *durée pure* の考であると思ふ。由來、哲学は理性より出立するものと經驗より出立するものとあつて、ベルグソンは後者の方に属するのであるが、普通に經驗より出立するといつて居る人々の經驗といふものは純粹經驗ではない、却つて思惟に因つて作為せられたものである。ベルグソンは一切の独断を除き尽して深く經驗其者の真相に到達せんとした、かくして補足し來つたものが純粹持続の考である。(中略)

純粹持続即ち我々の内面生活は不斷なる内面的進歩發展でなければならぬ、即ち創造的發展 *evolution créatrice* であるのである。我々の現在には決して過去のない現在ではない、我々の過去が自ら發展して來つた現在である、我々の未來は又此現在が自ら發展して行く未來である。我々の背後に

はいつまでも我々の過去が圧迫し来るのである、我々はいつでも我々の歴史を負うて立つて居るのである。我々の獨創性は実に此処にあるのである。

(ベルグソンの純粹持続)⁽²⁶⁾

西田はベルクソンの紹介という形で、その中心概念である「純粹持続」について、それが従来「經驗」とされていたものを「思惟に因つて作為せられたもの」として否定した上での「經驗其者の真相」であり、「不斷なる内面的進歩發展」、「創造的發展 evolution créatrice」という言葉で自ら發展（進化）するものであることを語る。この論文の冒頭で、西田はベルクソンの考えに対して「多大の興味を有つて居る」と語り、さらにはこの論文を収録する『思索と體驗』（大正四年發行）の「序」においても、「京都に來たはじめ、余の思想を動かしただものはリッケルトなどの所謂純論理派の主張とベルグソンの純粹持続の説とであつた」と自身に対するその影響の深さを述べている⁽²⁷⁾。

また、日本におけるジェイムズとベルクソンの思想の受容は「固定した存在に対する生成と躍動、硬直した形式に対する内的充溢、外面性に対する内的直接性」を特徴とする「生の哲学」⁽²⁸⁾を土台とした、大正時代の「生命哲学」、「生命主義」の勃興へとつながっていくものとされる⁽²⁹⁾。大正三年に出版された『ベルグソン哲学の神髓』には、ベルクソンの哲学を紹介する上で、「哲学」について「単に知識理性的作用ではなくて、全自我乃至生活全体上の事象となるに至つた」と述べられ、「哲学者」

は「生命」を「成長し創造し行くべきもの」とする認識が示されている⁽³⁰⁾。他にも、同じく大正三年に出版された『ベルグソンと現代思潮』において、在野の哲学者である野村限畔は、「現代哲学の特色」として、「一、反理智的であること」、「二、個性の概念を重んずること」、「三、活動的創造的であること」と述べ、その流れの中にベルクソンの哲学を位置付けていく⁽³¹⁾。これらに見られるように、明治末、大正初期のジェイムズ、ベルクソン受容の要点として、このような「知性」を批判し「生成」を語ることがあつたのであれば、当時の日本にはこのような思想を受容する土壌があつたと言える。

このような日本の思想的な土壌と、「現代日本の開化」において「形式」や「主義」に対する批判を根底に「歪み」を生むものとして「外発的」な開化を、また「花が開くやうに」「自然に出て發展する」ものとして「内発的」な開化を語る漱石の言葉は決して無関係なものではないだろう。そうであるならば、「現代日本の開化」での漱石の「獨創性」を問う上で、このような土壌を視野に入れて考察する必要がある。同時代における「内発的」なものをめぐる文脈との比較については、稿を改めて論じたいと思う。

【注記】

1 もとは明治四十四（一九一）年八月十五日に和歌山で行われた講演。文章としては、『朝日講演集』（朝日新聞合資会社、明治四十四（一九一）年十一月）に集録。

- 2 引用は『日本文学研究資料叢書 夏目漱石I』（有精堂出版、昭和四十五年（一九七〇）年一月）による。初出は『文学界』昭和十九（一九四四）年一月。
- 3 小森陽一他編『漱石辞典』（翰林書房、平成二十九（二〇一七）年五月）。「現代日本の開化」の項は柴田勝二氏が執筆。
- 4 佐藤泉「近代」と「日本近代」夏目漱石の／による再検証（『青山学院女子短期大学紀要』平成九（一九九七）年十二月）に漱石の近代批判に見られる「日本の皮相性と歪みを語る言説の型」について「はじまり」に関してはさらに遡られていい」として、漱石以前のものとして北村透谷や徳富蘇峰の言説が提示されている。
- 5 もとは明治四十四（一九一）年八月十七日に堺で行われた講演。文章としては、『朝日講演集』（前出）に集録。
- 6 佐藤泉『片付かない（近代）』（日本放送出版協会、平成十四（二〇〇二）年一月）の「第七章 変人漱石」には「中味と形式」について次のような指摘がある。
内容の多様さがある程度を超えて、それまでの概念や名前が有効でなくなつたときに、概念に合わせて内容を切り縮めるのは暴力だというのだ。（中略）まとめ、片付けるといふことこそ、漱石が最も強く批判する思考方法である。
- 7 小宮豊隆『漱石の芸術』（昭和十七（一九四二）年十二月）の「評論・雑篇」で、「イズムの功過」と「中味と形式」の問題意識の相似性が指摘されている。
- 8 「東京朝日新聞」明治四十三（一九一〇）年七月二十三日
9 明治四十四（一九一）年六月十八日に長野県会議事院において行われた講演。
- 10 『定本 漱石全集 第二十五巻 別冊上』（岩波書店、平成三十（二〇〇八）年十二月）
- 11 漱石の読書時期について、『多元的宇宙』は、明治四十三（一九一〇）年九月頃と考えられる。『時間と自由』は、読み始めたのが明治四十四（一九一）年六月二十八日頃と考えられる。この点は、拙論『行人』一郎の「実行的な僕」をめぐって——講演「中味と形式」との関わりから（『近代文学論集』平成二十九（二〇一七）年三月）の注22を参照。
なお、本論に関わるものを年代順に並べると次のようになる。
明治四十一年
二月十五日 講演「作家の態度」
明治四十三年
七月十九日 「文芸とヒロイック」、二十三日 「イズムの功過」
九月二十三日 W・ジェイムズ『多元的宇宙』を読み終える
※読み始めたのはこの年の夏
十月二十九日「思ひ出す事など」連載開始
明治四十四年
六月七日 講演「教育と文芸」
六月二十八日 H・ベルクソン『時間と自由』を読み始める
八月十五日 講演「現代日本の開化」、十七日 講演「中味と形式」
12 大久保純一「第七章 ジェイムズの哲学——門」から『彼岸過迄』、『行人』へ（『漱石とその思想』荒竹出版、昭和四十九（一九七四）年十月）
13 本論における『多元的宇宙』（A pluralistic universe）の引用は、William James, *A pluralistic universe*. London: Longmans, Green, and Co. 1909. に

る。漱石旧蔵書と同じものであることを確認済である。また訳文は、吉田夏彦訳『ウィリアム・ジェイムズ著作集 第六巻 多元的宇宙』（日本教文社、昭和三十六（一九六二）年五月）からのものである。邦題も同書による。

14 A pluralistic universe. p. 220

なお東北大学付属図書館の漱石の蔵書のマイクロフィルムを見ると、この部分は数行にかかる形で余白部分が傍線が引かれている。

15 「東京朝日新聞」明治四十三年（一九一〇）年十月二十九日、明治四十四年（一九一一年）二月二十日。引用は第三回（明治四十三年（一九一〇）年十一月八日）。

16 重松泰雄「漱石晩年の思想——ジェイムズその他の学説を手がかりとして——」（『漱石 その新たな地平』おうふう、平成五（一九九七）年五月）。初出は昭和五十三（一九七八）年九月。

17 ここでの漱石の共感について、従来の研究では、『多元的宇宙』で示された世界観と『彼岸過迄』の構成の関連を指摘した小倉脩三氏の論（『彼岸過迄』論の手がかりとして）（『夏目漱石 ウィリアム・ジェームズ受容の周辺』有精堂、平成元（一九八九）年二月）に見られるように、『多元的宇宙』で示された世界観に対する漱石の共感が論じられてきた。この点は重松氏も同様に、「漱石はジェイムズの結論・仮説にはげしく反撥しながら、しかも実際は、一方でそのような考えに惹かれていたのではないか、少なくとも深い関心を寄せていたのではないか」と述べている。

この「ジェイムズの結論・仮説」とは「思い出す事など」の第十七回で語られる「大いなるものは小さいものを含んで、其小さいものに気が付いてゐるが、含まれたる小さいものは自分の存在を知るばかりで、己等

の寄り集つて拵らえてゐる全部に対しては風馬牛の如く無頓着である」という世界観のことであるが、「思い出す事など」の同じ回で「然したゞ仮定だけでは、如何に臆病の結果幽霊を見やうとする、又迷信の極不可思議を夢みんとする余も、信力を以て彼等の説を奉ずる事が出来ない」と述べ否定してゐる。

18 A pluralistic universe. p. 218-220

19 W・ジェイムズ著、伊藤邦武編訳「純粹経験の哲学」（岩波書店、平成十六（二〇〇四）年七月）の「第七章 経験の連続性」訳注1参照。

20 「東京朝日新聞」明治四十三年（一九一〇）年七月十九日

21 「創作家の態度」における「態度」の問題がジェイムズの心理学をもとにしたものであることは、拙論「漱石の文学観とイブセン——「文芸の哲学的基礎」「創作作家の態度」を中心にして」（『九大日文』平成二十八（二〇一六）年十月）で具体的な文脈をもとに指摘している。

22 もとは明治四十一年二月十五日の第一回「朝日講演会」で行われた講演であり、文章としては同年四月「ホトトギス」に発表された。

23 A pluralistic universe. p. 253-254

なお東北大学付属図書館の漱石の蔵書のマイクロフィルムを見ると、この部分の一部は数行にかかる形で余白部分が傍線が引かれている。

24 A pluralistic universe. p. 263-264

なお東北大学付属図書館の漱石の蔵書のマイクロフィルムを見ると、この部分の後半は数行にかかる形で余白部分が傍線が引かれている。

25 ベルクソン『創造的進化』の第四章は、「あらゆる實在、あらゆる知識が完成した形で含まれる無時間的な概念や原理を想定して、そこからすべての存在を演繹することによって存在の問題に答えようとする」思考

を退け、「あらゆる実在が生成であるという結論」を述べるものである。

〔合田正人、松井久訳『創造的進化』（筑摩書房、平成二十二（二〇一〇）年九月）の「解説」（松井久執筆）参照〕

26 引用は『西田幾多郎全集 第一巻』（岩波書店、昭和二十二年七月）による。なお、旧字体を新字体に改めた。初出は「芸文」明治四十三（一九一〇）年八月

27 『思索と体験』（千章館、大正三（一九一四）年三月）は、西田が明治四十三年に京都に来て以降の、京都時代初期に書かれた論文・評論を主にまとめたものである。「序」の引用は『西田幾多郎全集 第一巻』（前出）による。なお、旧字体を新字体に改めた。

28 『哲学・思想事典』（岩波書店、平成十（一九九八）年三月）の「生の哲学」（丸山高司執筆）の項参照。

29 船山信一『大正哲学史研究』（法律文化社、昭和四十（一九六五）年十一月）の「Ⅲ 大正哲学における生命哲学の理解」に「大正時代のアカデミーにおいてはそれと同時に生命哲学の大きな流れがある。そしてそれは最も多くベルグソンに結びつくが、しかしまたジェームズなどのプラグマティズムとも関連している」とある。また「生命主義」については、鈴木貞美編『大正生命主義と現代』（河出書房新社、平成七（一九九五）年三月）の「大正生命主義」とは何か（鈴木貞美執筆）参照。

30 稲毛詛風「上編 緒論 第一章 思想界の新傾向」（稲毛詛風、市川虚山『ベルグソン哲学の神髓』大同館書店、大正三（一九一四）年三月）。なお、旧字体を新字体に改めた。

31 野村隈畔「第二編 ベルグソンと現代思想 第一章 現代哲学の特色」（『ベルグソンと現代思潮』大同館書店、大正三（一九一四）年五月）。な

お、旧字体を新字体に改めた。

※ 漱石の作品、評論、講演等の引用は全て『漱石全集』（岩波書店、平成五年十二月—平成十六年十月）からのものである。（米子工業高等専門学校講師）